

35 価格と生産 F・A・ハイエク

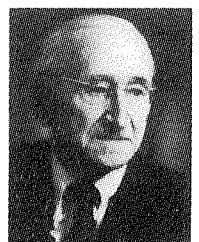
Prices and Production, 1931, Friedrich August von Hayek

ハイエク（一八九九〜一九九二）は、戦後は自由主義社会哲学の完成者として名をはせたが、一九三〇年代には、理論経済学、特に貨幣的景気変動理論の研究者として知られていた。彼の理論は、オーストリア資本理論を基礎としている。『価格と生産』は一九三一年二月にLSEで行われた一連の講義をまとめたものである。ハイエクを招聘したのはオーストリア学派の経済学に強い関心を抱いていたL・ロビンズらであった。この講義が好評であったため、ハイエクは同年LSE教授に招聘された。五四年に渡米、シカゴ大学社会道徳科学教授、六二年にはヨーロッパに戻りフライブルグ大学教授に就任した。六八年以後の九年間、故郷のザルツブルグ大学で教鞭をとった後、晩年はフライブルグで過ごした。

ハイエクは、財を、われわれが直接消費可能な最終消費財と最終消費財を作るための生産財に分類する。生産者は現在の消費と将来の消費を予測しながら生産計画を立てなければならぬ。ハイエクは、時間が延びれば生産力が増加すると仮定した。たとえば、ワインを生産する場合、できる限り短い期間で作れば、生産に必要であ

った労働力、樽、倉庫などの費用は短期間で回収できる。ところがワインは樽に漬け込んだ後、一定期間寝かせた方が高品質で高価なものとなる。この場合、瞬時に生産が終わる場合と比べて、さまざまな生産要素を投下してから回収するまでに時間差が生じることになる。その間にかかる生産費はすべて生産者が負担しなくてはならない。一定期間、生産期間を延ばすことによって、どれぐらい利益が増えるかがわかっているとすると、生産者はワインが市場に出るときの需要量や価格を予想しながら生産期間を決定することができる。つまり、生産者は、今すぐ売れる最終消費財を作るような生産過程に資金を投入すべきか、それとも将来の需要を見越して、時間がかかるが、利益が高くかつ多くの最終消費財を生み出すことのできる生産過程に資金を投入すべきかという選択をすることになる。

しかし、より期間の長い生産方法を採用した方が利益が大きいとしても、生産者は無限に生産期間を延ばすことはできない。時間をかければかけるほどその間にかかる費用は多くなるからである。生産者の自己資金が莫大に



LSE

London School of Economics and Political Science. フェビアン

社会主義の中心人物であったウェップ夫妻により一八九四年に創立された。当初より労働者のための大学として創設されたが、以後、多くの著名な経済学者を輩出している。

オーストリア学派

限界革命の主役の一人カール・メンガーの経済理論に影響を受けた一派。主に、オーストリア出身の経済学者が多かったことからこの名称で呼ばれる。限界原理を経済学の中に持ち込みながらも、主観主義的方法から作り上げられた市場観はワルラスの系譜の経済学とは大きく様相を異にし

あるときはこれはさほど問題ではないだろう。だが、資金を外部から調達しなければならぬ場合、資金調達のコストが生産計画の制約となる。古典派の利子理論では、資金調達のコストすなわち利子率は、資金の供給量と需要量が一致するところで決まるとされる。消費者は所得を用いて最終消費財を購入するのだが、将来に何らかの期待をしている場合、彼らは必ずしもすべての所得を消費せずに、一部を将来の消費のために貯蓄することになる。利子率は、消費者の消費計画と生産者の生産計画が両立する点で成立しているわけだから、これは生産財の需給、最終消費財の需給、貨幣市場の需給をすべて均衡させていることになる。

この状態から、消費者が消費を減らし、貯蓄を少しばかり増やしたとしよう。貨幣市場に流れ込んだ追加的資金を利用して、生産者はより長い期間のかかる生産方法を採用しようとするであろう。それにより、そこで使われる生産財の需要が一時的に増加し、生産財の価格が上昇する。反対に、最終消費財は需要が減少するので相対的に価格が下落する。このため、市場にある資金は生産財の生産により多くが流れ込むことになる。生産財の生産量が増え、消費財の生産が低下すると、今度は逆に消費財の価格が相対的に上昇し、生産財の価格が相対的に下落する。そのため市場にある資金も消費財市場に再び向けられることになる。この調整過程を通じて、変化し

た最終消費財の需要に対応したより生産力の高い生産構造が完成する。生産に使われた資金は最終的には消費者の所得になる。消費者が再び所得に占める消費と貯蓄の割合を変えない限りは、この生産構造は維持されることになる。

ところが、資金供給が消費者の判断とは関係なく、銀行の信用創造によってなされたとしても、今回の資金供給は最終消費財の需要を全く反映していない。先ほどと同様、生産者は供給された資金を使ってより期間の長い生産方法を採用し、それに応じた最終消費財と生産財の価格の調整を行う。しかし、今回は消費者の選好が変化していないにもかかわらず消費財価格は上昇するため、消費者は欲する量の財を一時的に購入できず、所得の増加後にその分を取り返そうとする。そのため、再び消費財価格が上昇し作り上げられた生産過程が不利になる。その結果、投下された資金が回収できなくなる。この過程をハイエクは恐慌と呼んだ。ハイエクによると恐慌は貨幣供給の無制限な拡大に起因するのである。

一時は話題を呼んだハイエク理論であったが、大恐慌に対しては説明力不足の感を否めず、ケインズ『一般理論』の登場とともに忘れ去られていった。(江頭進)

翻訳 ● 古賀勝次郎訳『価格と生産』ハイエク全集第一巻所収(春秋社、一九八八年) / 参考文献 ● 根井雅弘著『現代の経済学』(講談社、一九九四年)

ている。メンガーの貨幣論やベーム・バヴェルクの資本理論をミーズや北欧学派のウィクセルらが一般均衡理論との接近を試み、ハイエクが完成させたといわれている。